

1 劇的対面

「私当年の攘夷論といふものは其意味であつたのであります、決して亜米利加を攘夷するのではない、侵略せんとする外国を攘夷するといふ事である、此の辺の処を誤解して下さるなといふて弁解したのであります、グリフィスは如何にもさうであつたかといふ事で翻りて意志相投じ肝胆相照して共に手を握つたのであります。」鍵括弧内、渋沢青淵記念財団竜門社編『渋沢栄一伝記資料』より引用

明治四十二年（1909）秋、総勢五十名以上の実業団を率いて米国各地を視察し、日米両国の交流を深めようとする長い旅の途上にあつた渋沢栄一は、ニューヨーク州でウィリアム・フルベッキが校長を務める学校に招待されました。その歓迎の席で講演をしたのが、かつてフルベッキ校長の父ギドと日本で深い親交をもち、当時州内で余生を送っていたウィリアム E.グリフィスでした。渋沢には、グリフィスが誰より日本を理解する学者だという認識が渡米前からありましたが、講演を聞いた後どうしても一言物申さずにはいられませんでした。それはグリフィスが、かつて攘夷主義に日本が覆われていた時代に敢然と開国策をとった井伊直弼を「頗る称賛し、井伊掃部頭があつたに依つて始めて日本の開国の基礎が定つたといふ演説をした」からでした。

「私は大に之を弁駁せざるを得ぬで、グリフィス氏の演説に対して大にこれを論破し殆ど討論会的の演説をした」。渋沢の主張とは、当時米国はともかく外国の侵略的行動が確かにあり、それに対抗する憂国の志士の精神がなかったならば、今日の日本はなかったという、自らも攘夷派であつた過去をもつ彼の胸奥からの言葉でした。

渋沢の反論を聞き終わったグリフィスは渋沢の手を握り、「私は形跡から言つたので事実を知らぬから、貴君が形跡以外の真相を述べたるは日本人としては御尤である」と返答したそうです。けれども彼は後の著作の中でも井伊直弼の功績を評価して書いています。

「一九〇九年、五十年間にわたる論争と、論理よりも憎悪をむき出しにし、歴史の理解よりもむしろ狂信性を示していたウルトラ・ミカド主義者たちの激烈な反対の後で、井伊首相の銅像が横浜に建てられた。島田三郎はその著書『開国始末』—ヘンリー・サトーの英訳がある—によって、この正当な名誉回復の仕事に大きく貢献した。」 岩波文庫『ミカド』（亀井俊介訳、原著 *The Mikado*, 1915）

違勅条約調印の汚名を着せられ殺された井伊直弼の名誉回復は、明治の旧彦

根藩士たちの悲願でした。明治が終わろうとする頃、彼らの尽力により大老の銅像が開港の地横浜（現在の掃部山公園）と彦根（横浜の翌年）に建立されましたが、その運動を後押ししたのは「公正の史伝」を求めるジャーナリスト島田が著した井伊の評伝でした。そして、その書が“Agitated Japan”（激論の日本）の題名で旧幕臣佐藤顕理（筆名ヘンリー・サトー）により英訳出版（1896年）された陰に、英文を校訂したグリフィスの助力がありました。訪米した渋沢から史論をぶつけられた時期、グリフィス自身が井伊直弼再評価の当事者だったのです。実は渋沢が渡米前からグリフィスという日本史論者の存在を知っていた背景には、渋沢もまた幕末期の一人の人物について、「公正の史伝」を残す悲願を抱えて生きていた事情がありました。

2 歴史家グリフィスとの出会い

徳川慶喜が朝敵の汚名と共に政治生命を断たれた時、渋沢は日本にいませんでした。慶喜が将軍となる以前、一橋徳川家の当主であった時代にその臣下となっていた渋沢は、旧主の無念と旧主への疑念を胸奥に宿しながら壮年期を生きました。なぜ勝てる戦を戦うことなく身を引いたのか、身を引くのであればなぜ鳥羽伏見の戦に及んだのか。その出兵は「当時の幕臣の大勢に擁せられて、已むを得ざるに出た」行動であり、日本が「実は大乱に陥る」ことを避けるため、「愚と言はれやうが、怯と嘲られやうが」恭順謹慎したのが旧主の心事だと渋沢が解したのは、明治も二十年の歳月を経た頃でした。

解してみると、他人からどれだけ誹謗されても「じつと御堪へなされて、終生之が弁解をもなされぬといふは、実に偉大なる御人格ではあるまいかと、尊敬の念慮」が増すばかりであり、「どうか公の偉大なる御事蹟を記述して」後世に残したいと、旧友の福地桜痴と語り、徳川慶喜の伝記編纂事業に着手しました。

最期の将軍慶喜の伝記は幕末政治史そのものであり、「殊に外国の事が又御一身の変化に最も強い関係を為して居るから、それらの事実は成るべく丁寧に調べなくてはならぬ」と考えた彼らは、徳川家の鎖国政策の由来に強い関心を持ちました。そして渋沢が出会ったのが、グリフィス著『皇国』（原題“The Mikado's Empire”）でした。イエズス会史料など西洋の研究を利用した『皇国』の記述から三百年前の事情を理解した渋沢は、自ら生きた同時代史においても「グリヒスの皇国といふものは、維新前後の事態を余程委しく書いてあります（※）」と評価し、後進の実業家たちに紹介しました。伝記編纂の過程で彼が福地に翻訳させた英語資料には『皇国』の他に、ケンベルの鎖国論やタウンゼント・ハリスの日記がありますが、後者の原文は晩年のハリスと親交があったグリフィスが編集出版したハリスの伝記に収載されたものでした。自身攘夷派の志士であった時

代、米国の総領事ハリスがいかに日本を国際社会へと親切に教え導いてくれたかを知り感動した渋沢は、かつてハリスが駐在した下田の玉泉寺に顕彰碑を建てるため尽力しました。建碑は昭和二年九月。日本を再訪したグリフィスと渋沢の会談から四ヶ月後でした。歴史著作を介してグリフィスを知った渋沢は、訪米して直接維新史論を弁じ合ってから十八年後、旧友として再び親しく語り合ったのでした。それが、維新世代の生き残りとなった二人の、最後の語らいとなるのでした。（本文における引用は特に注記の無い場合前出『伝記資料』によりますが、第二節では※の他は『徳川慶喜公伝』渋沢の自序より引きました。『公伝』の編纂は慶喜の死去から四年後、大正六年に完成しました。）

3 再会と別れ

昭和二年（1927）五月九日、日本女子大学でグリフィスと渋沢の対談が行われました。その学校は創立以来、女子教育の熱心な推進者だった渋沢によって支えられていました。十二日、東京飛鳥山の渋沢邸で、グリフィス夫妻を歓迎する午餐会が開かれました。参加者の大半は女性で、大学関係者の他は、半世紀前にウィリアム・グリフィスの姉マーガレット（弟による愛称はマギー）が教師を務めた官立女学校に通った同窓生でした。マギー先生に教わった生徒の中に渋沢の長女、穂積歌子もいました。彼女の夫陳重は前年他界していましたが、彼は開成学校でウィリアムに学び、留学を経て近代日本の法学の礎を築いた人でした。

遠い少女時代の追憶に時を過ごす輪に混ざって、渋沢を公私にわたり支えたもう一人の女婿、阪谷芳郎の姿もありました。若かりし彼が大蔵省で官途に就いて二年後、商社員だった兄の達三がニューヨークに赴任中に急逝しました。阪谷達三は、日下部太郎と同じニューブランズウィックの墓地に眠っています。

先に逝った者たちの志を継いで、明治の日本は発展しました。グリフィスは渋沢との対談で、日本の進歩は驚くばかりで世界に比類がないが、それは遠い時代の先人が「文明の素地を為して居つた」からだと言いました。渋沢は「日本人は一般に憂国的で、国際心に乏しい」と嘆き、先人ハリスの事績を日本人に知らせたいと、建碑の予定について話しました。当時の彼には、先人たちが築いた日米関係の基盤が崩壊しつつあるという危機感がありました。

大正十三年（1924）、米国において日本人を狙い撃ちに排斥する移民法が成立しました。明治以降日本人が多く移民したカリフォルニア州における政治的軋轢は日米両国の悩みの種であり、渋沢が実業界を退き民間外交を自ら晩年の務めとした契機でもありました。日本が発展し大国となるほど外国からの疑念も摩擦も生ずる中で、標的となったのは西洋人と見た目も文化も違いすぎる日本人移民でした。攘夷の時代を知る渋沢にとって、国際交流と相互理解の死活的な重要性は自明であり、彼は官民の有識者で日米関係委員会を組織し（1916年）、移民問題について太平洋兩岸の対話に意を尽くしました。その積年の努力が水泡に帰

するほどの挫折感を彼に与えたのが、米国連邦議会における新たな移民法の成立でした。

それは米国が州の地域的事情ではなく、国家レベルで日本人を、ただ日本民族であるという理由で差別待遇するものとして、日本国民間に広く深い憤激の念を喚起しました。日本人にとって、開国以降の西洋化・近代化の努力の歴史が、全否定されたようなものでした。渋沢は絶望感を吐露しながらも、次世代につなぐ灯を絶やさず守り続けました。グリフィス夫妻が半年間、北海道から朝鮮・満洲に及ぶ旅で訪れた全国各地で政財界の盛大な歓迎を受けた背景には、米国における旺盛な執筆・講演活動で日米関係を長年支え続けた恩人に対する外務省の意向及び、日米関係委員会会長、すなわち渋沢のはたらきかけがありました。

同時期、米国の宣教師が米国の子供たちからたくさんの人形を募集し、日本の子供たちに贈りました。総計一万を超えた「青い目の人形」を受け入れて全国に配り、また御礼の日本人形を米国に贈る活動の中心にいたのも、渋沢栄一でした。

グリフィスは八十三歳の高齢にも関わらず、訪れた全国各地で精力的に講演しました。「途中小生は倶楽部・協会・学校・教会等に於ける演説に忙しく、日米両国人相互の間の諒解と友誼とを増進するに微力を尽す事を得たるは小生の欣快とする処に候」。九州から渋沢に送られた手紙には、志を共有する者が最後の務めを果たす様子がつづられていました。翌年、ウィリアム E.グリフィスは母国で静かに世を去りました。その三年後、渋沢栄一も九十一歳で永眠しました。

帰国の船上にあったグリフィスに宛てて渋沢が書いた手紙を最後に紹介します。

「大洋丸にて同じく八十歳以上の友人なるウキリアム・エリオット・グリフィス博士殿

東京、一九二七年六月十一日 渋沢栄一

拝啓、益御清適奉賀候、然ば貴台愈々我国を去られんとするに臨み、小生は貴台の第二回の日本御訪問が成功裏に終結致候に対し衷心より慶賀仕度候、人類活動の各方面に於て記録破りの出来事多き現代に於ても、貴台は日米親善なる史的方面に於ける競争に於ての優勝者にして比肩するもの無之義を当然誇り得ることゝ存候、此競争に於ける勝利の栄冠は永久に何人も窺はざるべく且窺ひ得ること明白に候（中略）

令聞及び貴台に対し衷心より平安の御旅行を祈り奉り候 敬具」

：本文中言及していない文献として、以下大変参考にさせていただきました。

『サムライボーイ物語 佐藤顕理伝』ヘンリー・サトウ著、石塚博訳・解説
碓井知鶴子「明治開化期におけるマーガレット・グリフィスの役割－啓蒙的女子教育の実態
解明への手がかりとして」

同「官立東京女学校の基礎的研究－在学生の「生活史」の追跡調査」

神奈川県立歴史博物館図録『井伊直弼と横浜』

島田昌和「明治後半期における経営者層の啓蒙と組織化 渋沢栄一と龍門社」

蓑原俊洋『アメリカの排日運動と日米関係』

○渋沢歌子の同窓生たち

昭和二年(1927)五月十二日、飛鳥山の渋沢栄一郎で開かれたグリフィス博士招待午餐会に出席した十四名が『伝記資料』により確認される。グリフィス夫妻、渋沢、阪谷芳郎と、日本女子大の関係者の他に、鳩山春子、石井筆子、黒田琴子、そして穂積歌子の名がある。彼女たち四人はみな、明治五年から十年まで(1872～1877)存続した、わが国最初の官立女学校、通称竹橋女学校に学んだ、日本の「女学生」のさきがけといえる女性たちだった。その学校で教えた先生が、開成学校におけるグリフィスの同僚 P.V.ヴィーダーの夫人や、グリフィスの五歳年長の姉マーガレット(弟ウィリアムによる愛称はマギー)だった。マギーは弟が福井から東京に移った明治五年に来日し、翌年三月から弟と共に帰国するまでの一年半、母国での教職経験を活かし、日本の少女たちの教師を務めた。明治六年に皇后の参観があり、当日表彰された生徒として渋沢ウタの他に、本多セン、津田恭仁(クニ)、青木コト、杉陽たちの名が残る。ウタ以外はグリフィス記念館 2 階展示写真でマギーを囲む女生徒として姿が見える(後列右端クニ、その左コト、前列右から二人目セン、左端陽)。

彼女たちの父親として、渋沢と同じく一橋慶喜に仕えた本多晋や、幕府開成所の教官で維新後学術団体「明六社」で活躍した当時の代表的知識人津田真道、杉亨二らがいる。津田は幕府がオランダに派遣した近代日本最初の留学生の一人だが、洋行後幕府の瓦解に会い、旧將軍家の静岡藩に一時勤め(学問所頭。グリフィスの斡旋で彼の親友 E.W.クラークが赴任する前に離任)、東京の新政府に請われて中央の官職に就いた経歴は渋沢と共通する。杉は老中阿部伊勢守の顧問、また日本の「近代統計の父」として知られる。

記念館 2 階展示写真でグリフィス姉弟に挟まれて座っているのは、マギーの優秀な生徒で通訳も務めた赤井米子(讃州高松藩出身)だが、彼女の夫となるのは、日下部太郎と同年に渡米留学した薩摩藩士吉原重俊(初代日銀総裁)だった。

尾張藩士青木信虎の娘琴子は、東京でグリフィスの同僚教師だったエドワード H.ハウスの養女となって渡米し、帰国後陸軍大学仏語教授黒田太久馬の妻となった。

肥前大村藩士渡辺清の娘筆子は、知的障碍児施設滝野川学園の創設者石井亮一と結婚し、夫亡き後自ら園長を務めた。渋沢栄一は晩年の十年間、学園の理事長を務めている。

信州松本藩士多賀努の娘春子と結婚した鳩山和夫(作州勝山藩)は、開成学校においてグリフィスの最も優秀な生徒だった。グリフィスが帰国した翌年文部省から派遣されて米国留学し、コロンビア、エール両大学で法学を修め、帰国して弁護士、また教育者、官僚・政治家として活躍した。春子も共立女子職業学校の創立者として知られる。夫妻の長男一郎、ひ孫の由紀夫は首相となっている。

杉陽の夫となった平井晴二郎(加賀藩)も、開成学校でグリフィスに学び、鳩山と同年米国に留学し、鉄道技術者となって日本の近代化に大きく貢献した。

渋沢歌子の夫となる穂積陳重(宇和島藩)も、開成学校でグリフィスに学び、鳩山や平井

に一年遅れて英国に留学し、法廷弁護士資格を得て帰国。国を代表する法学者となった。

グリフィス姉弟の生徒から何組もカップルが生まれているのは、共に新日本を築く世代として期待され、進んだ教育を受けた男女という、同世代において彼ら彼女らが相当限られた存在だったことを思えば不思議ではない。

(参考文献) 碓井知鶴子「明治開化期におけるマーガレット・グリフィスの役割－啓蒙的女子教育の実態解明への手がかりとして」

同「官立東京女学校の基礎的研究－在学生の「生活史」の追跡調査」

○グリフィスによる *Townsend Harris, first American envoy in Japan* の出版

タウンゼント・ハリス(1804-1878)晩年の四年間、その知遇を得たグリフィスは、ハリスが日本滞在中の記録を保存しつつも、国の機密に関するゆえ生前は公開しないという意味を確認していた。タウンゼントの没後、その遺産を管理する姪のベッシーから日記の編集・出版を託されたグリフィスの手により明治 28 年(1895)、日本外交史の貴重な史料が世に出ることとなった。当時外務次官だった林董は、駐米公使栗野慎一郎より贈られた一冊を読み、かつて老中堀田備中守(佐倉藩主)に近侍した実父佐藤泰然から「ハリスを激賞して措かざる言」を聞いて以来心にあったハリスへの仰慕の念をいっそう深めたと、後に書いている(後述の生駒糸蔵の訳書序文)。渋沢栄一も明治 34 年に龍門社(渋沢を慕う実業家の団体)の会合で、グリフィスの『皇国』と共にハリス日記を「得難き史料」として紹介している。徳川慶喜公伝編纂の過程で盟友福地源一郎が翻訳したとみられる。その講話における渋沢もまたハリスを激賞して措かない。「私は過日之を読んで見ましたが、ドウも外国人の日本へ来て、此未開国を開くに就て力めた有様といふものは実に感心なものです、何ともいふにいはれぬ焦思苦心であつて、感佩といはふか敬服といはふか、嘆するに余りありといふべきことであります(中略)真成に日本人をして外国のあるといふこと、又貿易といふものゝ必要なること、国と国との貿易の条約は斯くするものであるといふ詳細なる手続までも、諄々として教へて呉れたのは此タウンゼント・ハリスである」(『渋沢栄一伝記資料』26 巻所収、竜門雑誌 164 号)。

その刊本をグリフィスから寄贈された佐藤顕理の薦めにより、内容を報知新聞に翻訳・掲載した生駒糸蔵が、佐藤を介しグリフィスの許可を得て、大正二年(1913)『維新秘史 日米外交の真相』の題名で一冊の本として出版した。序文を寄せた林董もまたハリスの人物について、「終始一貫人道の大義に則り、所見公平、最も信義を重んじ、日本の開発を念としたる跡明らか」「熱心誠意を以て万事を決し」「時の幕府有司のハリスより受けたる感化多大なりし」「されば日米親交は遡りて其源流を繹めれば、ハリスの感化なり」と激賞して措かなかった。だが、島田三郎が寄せた序文には、当時の世相を映して既に不吉な一節が見られる。「何者の痴漢ぞ日米戦争の浮説を立てて風なき波なきの太平洋を擾さんとするぞ」。

○明治四十二年、横浜の井伊直弼銅像除幕式に際しグリフィスが贈った祝辞

拝啓国歩艱難の時に当りて、其身を致されたる斯人の御像の下に会合せらるる諸君へ祝辞を呈するは、拙者の光栄とする所に有之候。回顧すれば一千八百五十四年若くは一千八百五十七年の往時に在ては、日本臣民たると、米国民たるとを問わず、何人と雖も当時の江戸政府が遭遇したる難局に当り、其大計を誤らず、之を処理することは幾んど不能の業なりしと存候。然るに井伊掃部頭は誠意誠心以て之に処し、神明に対し其正道なりと信じたる所を正確に断行せられたりしことは、拙者の深く信ずる所に有之候。苟も亜米利加合衆国国民にして、維新以前に於ける騒擾の時を知る者は何人と雖も、我北米合衆国華盛頓市博物館に井伊公の御像が安置せられあるを誇らざる者なかるべしと存候。井伊公は日本帝国を外患より救われたること疑なし、其当時合衆国の全権公使たりしタウンゼントハリス氏が、如何に江戸政府の大老を歎賞せられしかは、拙者が其親友として熟知致居候処に有之、若し同氏をして今日尚在らしめば、今般横浜に於ける御像の建設に対し歓喜措かざるべしと存候。歲月匆匆日本国民が挙て正義に謳歌する日来るならば輿論と史家とは国家忠良の士たる井伊掃部頭の功勞を表彰するに於て、一致するに至るならんと信じ候。此挙行に際し喜悅禁ずる能わず候。依て上大日本皇帝陛下に対し奉り、下万世連綿たる大日本国に対し「万歳」を唱へ奉祝賀候。謹言。

一千九百九年六月一日

紐育州イサカ市に於て

ウキリアム、エリオット、グリフィス署名

元彦根藩主井伊直弼公御遺族及び御友人御中

北村寿四郎『世界の平和を謀る井伊大老とハリス』【1934年、近江人協会発行】所収。

（漢字とかなづかいは現代的に改めました）

※著者北村は、実父大久保権内が井伊直弼の公用人として機密に与り、後明治二十年（1887）に政府修史局に提出する「公用方秘録」と「秘書集録」の筆写を囑託されて日夜従事し、遂に完了して妻の弟中村不能斎に渡した当日に卒去した逸話を語っている。その前年（1886）東京世田谷豪徳寺における井伊直弼二十七回忌の法会に参じた島田三郎は、不能斎が直弼の事績をまとめた書「磯打浪」を借覧し、新聞記事を連載した。旗本の家に生まれた島田は、当時の歴史が体制擁護のため不公正な記述に陥り、とりわけ井伊直弼に関わる言説が偏見に満ちていることを痛惜し、公正な伝記を著す念願から、史料について彦根藩関係者に相談していた。大老遭難後の藩の危機に際し、政権の機密を隠滅するため廃棄処分と決した文書を、四半世紀にわたり自己の一存で密かに火薬と共に保存し、発覚した際には火をつけて腹を切る覚悟でいた旧藩士大久保章男が、島田の記事を読み、時機漸く至れりと判断して公にした文書が「秘書集録」であり、『開国始末』執筆を支える史料となった。『開国始末』は命がけで公文書を後世に伝えた武士の志の結晶といえる。横浜に銅像が建ったこの年、帝国大学史料編纂官中村勝麻呂（不能斎の甥）による史書『井伊大老と開港』が刊行されている。

○公益財団法人渋沢栄一記念財団が運営するデジタル版『渋沢栄一伝記資料』においてウェブ上に公開されているテキスト（2022年2月グリフィス記念館職員閲覧）

検索メニュー「各巻リンク」から26をクリック → p288-296【リスト DK260055k 内】
1901年、竜門社での講話の中で、渋沢の日本史研究においてグリフィスの著書『皇国』が重要な参考資料になったことを本人が話しています。

32巻 p181-182【DK320009k-0008】

竜門雑誌 269号所収「青淵先生米国紀行(続)」の中に、1909年の旅において、渋沢がグリフィスの著書を賞賛しつつ、講演内容（井伊直弼評価）に反論した演説の記事があります。

47巻 p319-324【DK470076k-0003】

竜門雑誌 265号所収記事。渋沢が大阪での講演(1910年)で、前年訪米した際のグリフィスとのやりとりについて話しています。

54巻 p40-43【DK540013k-0007】

竜門雑誌 275号所収。上記の話について、雑誌『実業界』に掲載された記事。

45巻 p108-113【DK450040k-0002】

竜門雑誌 275号所収記事。渋沢が1911年の埼玉県での講演で、二年前の訪米時にグリフィスの演説に反論した話をしてしています。

57巻 p603-613【DK570292k-0002】

竜門雑誌 350号所収記事。1917年、第一次大戦下の時勢において、長野市で講演した渋沢が八年も前の渡米時のグリフィスへの反論の話をしています。特別印象に残った出来事なのかもしれません。

37巻 p397-404【DK370099k】、p433-434【DK37104k-0001】

1924年の排日移民法成立を受けて、汎太平洋クラブで渋沢が演説した内容を伝える当時の新聞記事など。「永い間…骨を折つて居た甲斐もない…神も仏も無いのか」と痛恨の講演。

39巻 p467-468【DK390240k】

1927年渋沢邸での午餐会の記録や、グリフィス歓迎を関西財界に依頼している手紙など。

35巻 p5-22【DK35001k】

1927年グリフィス歓迎関連の記事多数。渋沢とグリフィスとの対談、別れの手紙など。